

IL Y A 構文と VOILA 構文の談話機能

—指示対象の情報特性とアスペクトの分析を中心に—

津田 洋子
(京都大学大学院)

様々な事態を表現する IL Y A 構文と VOILA 構文（特に〈IL Y A / VOILA + 名詞句 + 関係節〉と〈IL Y A / VOILA + 補文節〉）について、以下の3つの観点から類似する構文タイプを比較・対照する。

1 : IL Y A 現象文と VOILA 現象文（〈IL Y A / VOILA + 名詞句 + 関係節〉）

同じ話し手の眼前で生じた出来事を表現するにも、(1)のように IL Y A 構文を用いる場合と(2)のように VOILA 構文を用いる場合がある。また、IL Y A 現象文とは異なり VOILA 現象文には、指示対象を三人称代名詞で表現した(2)のような文タイプが数多く存在する。このような違いは IL Y A 現象文と VOILA 現象文のどのような違いから生じるのだろうか。

(1) Papa ! Y a maman qui pleure ! (*Un secret*)

(2) Bon Dieu ! Les voilà qui s'amènent ! (*Tirez sur le pianiste*)

2 : 状況陰題を持つ〈IL Y A + 名詞句 + 関係節〉と〈IL Y A + 補文節〉

関係節を用いた IL Y A 構文には、状況によって形成されたトピックに対する説明を行う文タイプ(3)が存在する。ところで〈IL Y A + 補文節〉も「*Qu'est-ce qu'il y a ?*」に相当する問いに対する答となる文であり(4)、両者はともに状況陰題に対する説明を与える文と考えられる。両者の違いはどこにあるのだろうか。

(3) (Charles の両親の店がめずらしく閉まっている。説明を求められて)

Il y a Charles qui se marie. (Rothenberg 1971)

(4) Qu'y a-t-il donc ? -Il y a que j'étouffe. (朝倉ノート)

3 : 現象文タイプの〈VOILA + 名詞句 + 関係節〉と〈VOILA + 補文節〉

〈VOILA + 名詞句 + 関係節〉と同じように、〈VOILA + 補文節〉においても話し手の眼前や発話の場で起こった出来事を表現する以下のような現象文が存在する。(2)のような関係節を用いた現象文とどのような違いがあるのだろうか。

(5) Allons bon, voilà qu'il pleut. (Julien Green, *Adrienne Mesurat*)

これらの構文について、特に指示対象の認知的な情報特性と状態変化の有無を考察し、IL Y A 現象文においては、New-Unused (Prince 1981)な指示対象も発話現場で発生した予期せぬ出来事に含まれることにより談話には初めて登場する指示対象として扱われ、文全体として新情報を提示する機能を持つことを説明する。一方 VOILA 現象文は、談話にすでに登場し話し手の意識の前面にある指示対象の状態変化や発話現場の状態変化などにより、場面転換の機能を持つことを説明する。また、状況陰題を持つ IL Y A 構文においては、状況陰題として話し手聞き手の意識の中で喚起された状況の要素がどこまで指定されているかによって(3)(4)の構文が使い分けられることを説明する。